

対口语中中国人日语学习者自称词使用情况的考察

何三玲

(湖南大学, 湖南省, 长沙市, 410000)

摘要: 本研究利用日本国立国語研究所《多语言母语日语学习者横断语料库》中的“对话”项目, 从自称词的使用形式和共现的日语助词两个角度对中国人日语学习者和日语母语者在日语口语中自称词的使用情况进行了量的考察。其考察结果如下: 自称词的使用形式方面, 中国人日语学习者和日语母语者都主要使用“わたし”这一形式, 但在使用数量上中国人日语学习与日语母语者在统计学上存在差异; 随着日语水平的增高中国人日语学习者自称词的使用形式会增加, 但其新增使用形式的使用数量整体上来说比较少。从共现的助词来看, 除了“自称词+は”之外, 中国人日语学习者在“自称词+の”和“自称词+に”的使用上显著多于日语母语者。

关键词: 自称词; 过多使用; 中国人日语学习者;

中图分类号: H0 **文献标识码:** A

1. はじめに

三輪(2000)は日本語学習者にとって「人称詞」の使用は必ずしも容易ではないと指摘した。日本語の人称詞の使用には、数多い表現のうちどれを使用するかという問題があると言われている。それに加えて、人称詞を用いるべきかどうかをどのように判断するかという問題もある。そのため、日本語学習者にとっては、正確に人称詞を使用することは習得上の重要な課題であるとも言える。

日本語学習者の自称詞の使用については、その使用過多がこれまで指摘されてきた。村上(1996)は、日本人の日本語の文章および会話では、一人称の主語が多く省略されるのに対して、日本語学習者は自称詞の「私」を過多使用するという結果を報告している。金谷(2004)によると、「私は」を言わなくても十分意味が通じる箇所に「私は」を入れることは、意味が通じるとしても、訳文のような悪文であると言われるという。すなわち、使わなくてもいいところに自称詞を使用することは、意味が通じるとしても、日本語母語話者が一般にはそのように言わないということから、マイナスの評価を受ける恐れがある。そのため、日本語学習者の会話に自然さと適切な使用を求めるには、自称詞の使用およびその指導は見逃してはいけない課題だと思われる。

そこで、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者の話し言葉における自称詞の使用について、日本語母語話者のデータと対照して、言語形式や後接する助詞から全体的な使用数を分析し、中国人日本語学習者の自称詞の量的な使用実態を明らかにしようとする。

2. 先行研究

これまでに日本語学習者の自称詞の使用について多くの研究がなされてきた。

まず、自称詞の言語形式から日本語学習者の自称詞の使用を考察するものとして田中

(2014) と小玉 (2016) が挙げられる。田中 (2014) は在日日本語学習者を研究対象にアンケート調査とインタビューをして、自称詞の言語形式とその使用者数を性差、母語、学習レベル、アニメとマンガの影響、日本での滞在期間などの視点から考察した。田中 (2014) は日本語学習者の自称詞の使用量に触れてなく、自称詞の言語形式だけを研究してきた。学習者の自称詞の使用に対して、言語形式だけではなく使用量にも注意を払う必要があると思われる。小玉 (2016) は日本語の代表的なテキストにおける「わたし」「ぼく」「おれ」の出現頻度や扱われ方を概観し、記述式のタスクシートを利用して、男性の中国人日本語学習者および日本語母語話者の自称詞の使用について調査した。

次に、自称詞の文法機能から日本語学習者の自称詞の使用を考察するものとして姫野 (1999)、楠本 (2010) と劉 (2020) などが挙げられる。姫野 (1999) は日本で留学している中国人日本語学習者の作文を用いて、39 名の日本語母語話者に作文中の「わたし」を含む名詞句のうち、不必要だと思うものにチェックしてもらった。その結果、書き言葉に関しては、母語話者は主題の変更のないところでの「わたしは」の使用や、冗長的な連体修飾成分の「わたしの」の使用に対して不自然さや過剰さを感じるとコメントした。ここから書き言葉では中国人日本語学習者は主題としての「わたしは」と連体修飾成分としての「わたしの」を過多使用することが分かった。楠本 (2010) と劉 (2020) は話し言葉における過多使用と見られる中国人日本語学習者の主題としての「ワタシは」について考察し、それらの過多使用の理由を分析した。

日本語学習者の自称詞の使用に関する先行研究においては以下のような二つの問題点が挙げられる。まず、話し言葉における女性の中国人日本語学習者の自称詞の言語形式はまだはっきりされていなく、日本語母語話者との異同や学習のレベルの影響があるかどうかも明示されていない。また、書き言葉において日本語学習者の連体修飾成分としての「自称詞+の」の過多使用は見られるが、話し言葉における使用状況はまだ不明のままで、「自称詞+は」と「自称詞+の」以外に、中国人日本語学習者は別の「自称詞+助詞」を日本語母語話者より多く使用しているのかもまだはっきりされていない。

したがって、本稿ではそれらの先行研究を踏まえて、日本国立国語研究所の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』を利用して、自称詞の言語形式と共起の助詞の二つの視点から話し言葉における中国人日本語学習者と日本語母語話者の自称詞の量的な使用実態を明らかにしようとする。

3. 研究概要

3.1 分析データ

本稿は日本国立国語研究所の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese as a Second Language)』 (以下「I-JAS」と略す) の「対話」項目を

利用して話し言葉における中国人日本語学習者と日本語母語話者の自称詞の量的な使用実態を調査する。

考察対象の選定については、男性の中国人日本語学習者の人数は女性の中国人日本語学習者と比べると、はるかに少なく、それから女性の中国人日本語学習者は主に「中級」「中級後半」「上級前半」¹の三つのレベルに集中している。そのため、本稿では自称詞の使用形式の男女差を考察せず、男性の中国人日本語学習者を研究の対象とせず、「中級」、「中級後半」と「上級前半」の女性の中国人日本語学習者と女性の日本語母語話者を研究の対象とする。具体的には、女性の中国人日本語学習者は中級 16 名、中級後半 16 名、上級前半 16 名（略して CCM、CCH）、女性の日本語母語話者 16 名（略して JJJ）、計 64 名を対象とした。

本研究の使用データと分析対象語数は表 3.1 に示しておく。

表 3.1 使用データと分析対象語数

話者	データと人数	総語数
日本語母語話者	16 名（1 次、2 次データ）	70757
中級の学習者 ²	16 名（1 次、2 次、4 次データ）	45073
中級後半の学習者	16 名（1 次、2 次、4 次データ）	55692
上級前半の学習者	16 名（2 次、4 次データ）	56093

自称詞の言語形式について、本研究では石黒（2013）の分類と言語形式を参考にする。また、本研究では話者一人だけを表す自称詞を考察のものとし、自分自身を表すのではなく他人を模倣する自称詞や複数形の自称詞を考察のものとししない。

以下の表 3.2 は上記の基準をもとに「対話」項目の各日本語レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の発話データから抽出された自称詞の使用量である。

表 3.2 各レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の
自称詞の使用量

話者	自称詞の使用量
日本語母語話者	136
中級の学習者	383

¹ J-CAT のレベル判定表によると、学習者の日本語レベルは 7 つあり、それぞれは「初級」「中級前半」「中級」「中級後半」「上級前半」「上級」「超級」である。

² 便宜のため、中級の中国人日本語学習者を「中級の学習者」と略する。その後の表でも同じく略する。

中級後半の語学習者	404
上級前半の学習者	344

3.2 分析方法

自称詞の言語形式と共起の助詞によって、中国人日本語学習者と日本語母語話者の使用した自称詞の粗頻度の使用量と調整頻度の使用量を計算し、そして統計解析のスタンダードソフトウェアのSPSSを利用し、データを分析して中国人日本語学習者と日本語母語話者との共通点と相違点を明らかにする。

4. 考察結果と分析

4.1 言語形式から見る自称詞の量的な考察

前述したように、石黒（2013）は日本語の自称詞は、英語や中国語と違い、多数の言葉があり、たとえば、代名詞の「わたし」「ぼく」、指示詞の「こっち」や親族名称の「お母さん」などがあると指摘されている。多くの言葉があるから、話者の性別や話し相手そして会話場面によって、自称詞を使い分けることができるようになる。

それなら、同じような場面で、同じような相手に対して、女性の中国人日本語学習者と女性の日本語母語話者とはどんな自称詞を使っているのだろうか。

自称詞の言語形式の統計については、女性の中国人日本語学習者の文字データを一つずつ目視で読んでから、自称詞の言語形式には「わたし」以外に「わだし」、「わらし」のような言語形式が存在していることが分かった。音声データを聞くと、それは中国人日本語学習者の発音上の間違いだということが分かる。そのため、「わだし」と「わらし」を「わたし」とした。

目視でデータを集計した結果、女性の中国人日本語学習者と日本語母語話者の自称詞の言語形式には「わたし」³「あたし」「うち」と「じぶん」⁴の四種類があることが分かった。

自称詞の言語形式によって、日本語母語話者と各レベルの中国人日本語学習者の自称詞の使用の粗頻度と調整頻度を表 4.1 のようにまとめた。

³ 発話データには「私」「わらし」「わだし」のような言語形式が存在している。

⁴ 発話データでは漢字「自分」で表示されているが、統一のために表 4.1 で平仮名で表示した。

表 4.1 言語形式による自称詞の使用量

話者	わたし	あたし	うち	じぶん	合計
日本語母語話者	115 ⁵ (16.25 ⁶)	15 (2.12)	6 (0.85)	0 (0)	136 (19.22)
中級の 学習者	381 (84.53)	2 (0.44)	0 (0)	0 (0)	383 (84.97)
中級後半の学習 者	395 (70.93)	7 (1.26)	1 (0.18)	1 (0.18)	404 (72.54)
上級前半の学習 者	300 (53.48)	27 (4.81)	14 (2.50)	3 (0.53)	344 (61.33)

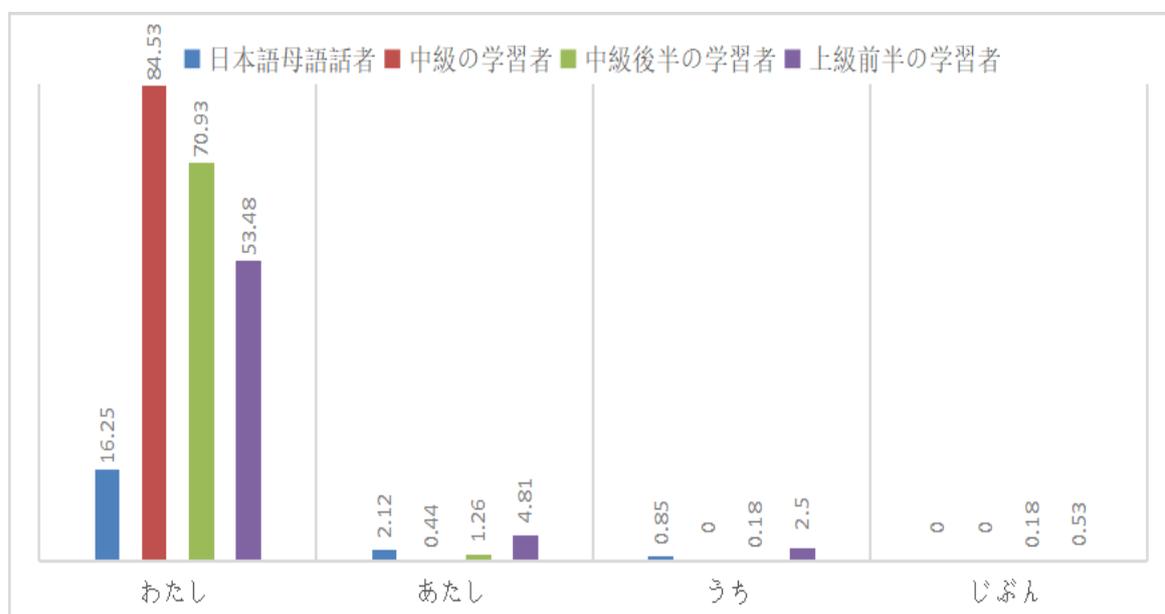


図 4.1 言語形式による自称詞の使用量(調整頻度)

表 4.1 と図 4.1 からわかるように、使用された自称詞の言語形式においては、女性の中国人日本語学習者も女性の日本語母語話者も主に「わたし」を使用している。つまり、話し相手が初対面の人である場合、中国人日本語母語話者も日本語母語話者も主に「わたし」という言語形式を使っている。金(2007)によれば、相手が初対面の場合で「わたし」を使うことにする 20 代の女性の日本語母語話者は 87 パーセントを超えている。今回の調査結

⁵ 粗頻度の使用量である。粗頻度とはコーパスからの生の頻度のことで、何の調整も加えていない頻度を指す。

⁶ 調整頻度の使用量である。調整頻度とは粗頻度÷コーパスの総語数×一定数で求められる値である。各レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の総語数が異なるため、コーパスから得られたままの粗頻度では比較できない。そのため、調整頻度を求めて比較する。本稿で得られた調整頻度は粗頻度÷コーパスの総語数×10000 で求められた。

果もこれに一致している。

「あたし」の使用については、中国人日本語学習者も日本語母語話者も「あたし」を使用するが、その使用量は「わたし」よりはるかに少ないと見られる。上級前半の中国人日本語学習者は日本語母語話者より多く使用していると見られるが、一人ひとりの使用数を見てみると、一人の中国人日本語学習者は「あたし」を24回も使ったことが分かった。また、熊抱（2006）によると、日本語の自称詞は性差が現れ、話し手と聞き手の関係や発話された時点でのフォーマルさの度合によってその使われ方が変化するとしており、以下の図にまとめている。

←インフォーマル			フォーマル→
(男性)俺	僕/自分	わたし	わたくし
(女性)← あたし	→自分	わたし	わたくし

図 4.2 日本語の一人称単数

この図から「あたし」はインフォーマルな表現であるということが分かる。インフォーマルな表現であるため、初対面の人とのインタビューではその使用数が少ないということがうかがえる。

「うち」の使用については、中国人日本語学習者も日本語母語話者も使用したが、その使用量は非常に少なく、一般的に連体修飾成分として使われている。たとえば、「うちの母」「うちの高校」など。

一方、女性の中国人日本語母語話者は「自分」という言語形式を4回使用しているのに対して、日本語母語話者は一回も使っていない。木川（2011）は、自称詞「自分」は東京語でも女性をも含め特定の集団では用いられると指摘している。その特定の集団とは体育会系のことである。女性の日本語母語話者の「自分」の不使用はそのことに関わっていると考えられる。それに対して、女性の中国人日本語学習者は自称詞としての「自分」の使用制限に詳しくなく、「自分」を使ってしまったのだろう。

言語形式によって各レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の一人ひとりの自称詞の使用量（調整頻度）に対して、まず各データに正規性の検定を行い、正規分布である場合一元配置分散分析⁷を行い、非正規分布である場合ノンパラメトリック検定をする。SPSSで分析した後、各レベルの中国人日本語学習者は日本語母語話者との間に有意差があるかないかが確認できた。各レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の「うち」と「自分」の総計使用量は30も越えていないため、本研究では以上のような検定をしな

⁷ 二つのグループの平均値の有意差を検討するにはt検定を用いるが、三つのグループ以上の平均値の有意差を調べる場合一元配置分散分析を用いる。

い。

正規性の検定を行った結果、「わたし」の使用量は正規分布であるのに対して、「あたし」の使用量は非正規分布であるということが分かった。

「わたし」の使用量（調整頻度）に対して一元配置分散分析を行った結果、中国人日本語学習者は日本語母語話者との間に有意差があると認められる（有意確率= $P=0.000 < 0.05$ ）。多重比較をしたあと、どのレベルの中国人日本語学習者でも日本語母語話者との間に有意差があり（有意確率= $P=0.000, .000, .002 < 0.05^8$ ）、中級と上級の前半中国人日本語学習者の間には有意差があり（有意確率= $P=0.016 < 0.05$ ）、中級と中級の後半、中級後半と上級前半中国人日本語学習者の間には有意差がなかった（有意確率= $P=0.112, .392 > 0.05$ ）。つまり、日本語レベルが上達するにつれて、中国人日本語学習者の「わたし」の使用量は減っていくが、どのレベルの中国人日本語学習者でも日本語母語話者より有意に多く使用している。

「あたし」の使用量（調整頻度）については、日本語レベルの上達につれて、中国人日本語学習者の「あたし」の使用量は増えてきたが、ノンパラメトリック検定をするとどのレベルの中国人日本語学習者でも日本語母語話者との間に有意差がないということが確認できた（調整済み有意確率= $P=0.904 > 0.05$ ）。つまり、「あたし」の使用量において中国人日本語学習者と日本語母語話者とは差異がないということである。

同じような場面で、同じような相手に対して、中国人日本語学習者も日本語母語話者も主に「わたし」を使っているが、その使用量において統計的に差異があることが上記の考察を通して分かった。日本語のレベルが上がるにつれて、中国人日本語学習者が使用した自称詞の言語形式が増えてくるが、その使用量は言語形式によりばらつきがあるものの、全体的に非常に少ないことが言えるだろう。

4.2 共起の助詞から見る自称詞の量的な考察

前述したように、これまでの研究は「私は」だけに注目して、自称詞とほかの助詞との共起の状況はまだはっきりされていないのが現状である。そこで、本節では共起の助詞から自称詞の使用実態を把握する。

本稿では粗頻度の使用数量の前六位の共起の助詞だけを考察する。それぞれ、「自称詞+は」、「自称詞+の」、「自称詞+無助詞」、「自称詞+が」、「自称詞+に」と「自称詞+も」である。「自称詞+無助詞」の用例は以下の例(1)のようなものがあった。

⁸ それぞれ中級の学習者と母語話者、中級後半の学習者と母語話者、上級前半の学習者と母語話者の有意確率である。

(1)⁹ 【ふるさとについて】¹⁰ 日本語学習者 CCM23

K-1420 : はい私一小さい頃、父さんと一緒に北京に住んでいました。

共起の助詞によって中国人日本語学習者と日本語母語話者の自称詞の使用量を表 4.2 にまとめた。

表 4.2 共起の助詞による自称詞の使用量

話者	自称詞 +は	自称詞 +の	自称詞 +無助詞	自称詞 +が	自称詞 +に	自称詞 +も
日本語母語 話者	27 (4.19)	26 (3.41)	27 (4.19)	24 (3.72)	0 (0)	11 (1.71)
中級の 学習者	170 (40.42)	117 (27.82)	10 (2.38)	6 (1.43)	9 (2.14)	12 (2.85)
中級後半の 学習者	177 (34.12)	89 (17.16)	16 (3.08)	8 (1.54)	17 (3.28)	5 (0.96)
上級前半の 学習者	145 (28.02)	61 (11.79)	36 (6.96)	16 (3.09)	10 (1.93)	9 (1.74)

⁹ 本稿における用例の記号について

①(1)は例の番号、【～】は会話文の前文脈、「日本語母語話者」は調査対象の分類、「JJJ51」は調査対象の調査番号である。調査対象は日本語母語話者と中国人日本語学習者の二種類があり、便宜のため、中国人日本語学習者を「日本語学習者」とする。会話の理解に支障がないとき、前文脈を示さない場合もある。

②Cは日本語母語話者の調査者で、Kは調査対象である。CとKの後の数字は、この発話が当該対話の会話全体において何番目であることを示す。

③発話内容はコーパスでの、会話データをそのままに文字化したものであり、発話文の中の（）は調査対象の間違っている発話文を直した内容である。

④<>の中の内容は、調査対象の発話と同時に発生した調査者の発話で、基本的にあいづちである。

⑤太字は筆者によるものである。

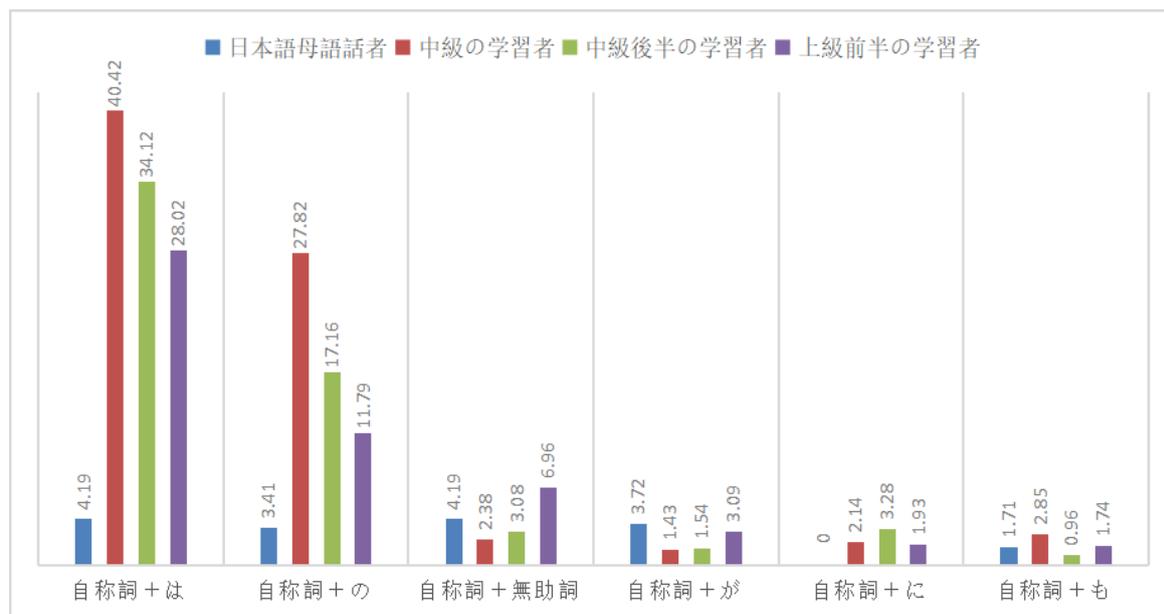


図 4.3 共起の助詞による自称詞の使用量(調整頻度)

共起の助詞によって各レベルの中国人日本語学習者と日本語母語話者の一人ひとりの自称詞の使用量(調整頻度)に対して、まず各データに対して正規性の検定を行い、正規分布である場合一元配置分散分析を行い、非正規分布である場合ノンパラメトリック検定をする。正規性の検定を行った結果、「自称詞+は」、「自称詞+の」、「自称詞+無助詞」、「自称詞+が」、「自称詞+に」、「自称詞+も」の六つのデータはいずれも非正規分布であることが分かった。

各種類の「自称詞+助詞」の使用に対してSPSSでノンパラメトリック検定をすると、中国人日本語学習者と日本語母語話者との間に、そして各レベルの中国人日本語学習者同士の間には有意差があるかどうかを確認できた。

「自称詞+は」の使用において、中国人日本語学習者と日本語母語話者の間に有意差があり(調整済み有意確率= $P=.000$ 、 $.000$ 、 $.002 < 0.05$)、各レベルの中国人日本語学習者の間に有意差がなかった(調整済み有意確率= $P=1.000 > 0.05$)。つまり、日本語レベルが上達するにつれて、中国人日本語学習者の「自称詞+は」の使用量は減っていくが、どのレベルの中国人日本語学習者においても日本語母語話者より「自称詞+は」を有意に多く使用している。中国人日本語学習者の「自称詞+は」の過多使用は日本語レベルと深く関わっていないと言えよう。

「自称詞+の」の使用において、中級と中級後半の中国人日本語学習者は日本語母語話者との間に有意差があり(調整済み有意確率= $P=.000$ 、 $.018 < 0.05$)、上級前半の中国人日本語学習者は日本語母語話者との間に有意差がなかった(調整済み有意確率= $P=.059 > 0.05$)。日本語レベルの上達とともに中国人日本語学習者の「自称詞+の」の使用量は減っていくが、各レベルの中国人日本語学習者の間に統計的に有意差がないと認められ、中

級と中級後半、中級後半と上級前半、中級と上級前半の調整済み有意確率はそれぞれ 1.000、1.000、0.151 である。

「自称詞＋無助詞」と「自称詞＋が」と「自称詞＋も」の使用については、中国人日本語学習者は日本語母語話者と有意差がなかった（調整済み有意確率= $P=.419$ 、 $.206$ 、 $.196 > 0.05$ ）。それは今回の使用されたデータの大きさに関わっていると考えられる。

「自称詞＋に」の使用については、中国人日本語学習者は日本語母語話者との間には有意差がある（調整済み有意確率= $P=.003 < 0.05$ ）。表 3.2 と図 3.2 から分かるように、中国人日本語学習者は「自称詞＋に」を一万語に二回か三回使っているのに対して、日本語母語話者は一回も使用していない。

5. おわり

本研究では、言語形式と共起の助詞の二つの視点から話し言葉における中国人日本語学習者と日本語母語話者の自称詞の使用に対して量的な考察を行った。

その結果、自称詞の言語形式においては、同じ話し相手が同じ初対面の人である場合、中国人日本語学習者も日本語母語話者も主に「わたし」という言語形式を使っているが、その使用量においてはどのレベルの中国人日本語学習者でも日本語母語話者と統計的に有意差があることが確認できた。「わたし」のほかに、中国人日本語学習者は「あたし」「うち」と「自分」も使っているが、日本語母語話者は「あたし」と「うち」を使用している。そして、「あたし」の使用量においては中国人日本語学習者と日本語母語話者の間に統計的に有意差がないことが分かった。また、日本語のレベルが上がるにつれて、中国人日本語学習者が使用した自称詞の言語形式が増えてくるが、その使用量は言語形式によりばらつきがあるものの、全体的に非常に少ないことが言えるだろう。

共起の助詞から見ると、「自称詞＋は」、「自称詞＋の」と「自称詞＋に」の使用においては、中国人日本語学習者と日本語母語話者との間には有意差がある。つまり、「自称詞＋は」のほかに、中国人日本語学習者は「自称詞＋の」と「自称詞＋に」において日本語母語話者より有意に多く使用していることが確認できた。また、日本語レベルの上達につれて、中国人日本語学習者の「自称詞＋は」、「自称詞＋の」の使用量は減っていくが、SPSSで検定し、各レベルの中国人日本語学習者の間には統計的に有意差がないと認められる。一方、「自称詞＋無助詞」、「自称詞＋が」と「自称詞＋も」の使用においては、中国人日本語学習者は日本語母語話者との間には統計的に有意差がないということが分かった。

参考文献

- [1] 石黒圭. 2013. 日本語は空気が決める 社会言語学入門[M]. 光文社.
- [2] 金谷武洋. 2004. 英語にも主語はなかった[J]. 日本語文法から言語千年史へ講談社選書メチエ.
- [3] 木川行央. 2011. 自称詞としての自分[J]. 言語科学研究:神田外語大学大学院紀要(17):39-65.
- [4] 金秀容. 2007. 男女の自称詞における本人の意識と社会的期待との比較[J]. ことば(28号):25-40.
- [5] 金秀容. 2008. 男女の自称詞における本人の意識と社会的期待との比較—相手が初対面の人の場合を中心に[J]. ことば(29):37-53.
- [6] 熊抱ゆかり. 2006. 言語とジェンダー —日英語に表れる性差[J]. 福岡大学人文論叢(38号):215-219.
- [7] 楠本徹也. 2010. 日本語の対話テキストにおける自称詞・対称詞の主題機能—中国人学習者の日本語による初対面会話からの分析[J]. 東京外国語大学論集(81):155-166.
- [8] 小玉博昭. 2016. 成人日本語学習者における一人称代名詞の使用—僕と俺を中心に—[J]. 日本学刊:35-48.
- [9] 曾儀婷. 2004. 台湾の日本語学習者の作文に見られる日本語の一人称代名詞の使用について[J]. 国際協力研究誌(2):29-47.
- [10] 田中優輝. 2014. 日本語学習者の自称詞の使用形式と男女差—留学生を中心とした調査から[J]. ことば:研究誌(35):49-64.
- [11] 三輪正. 2000. 人称詞と敬語—言語論理的考察[M]. 人文書院.
- [12] 村上京子. 1996. 「わたし」の使用過多について[J]. 日本語研究コース修了生追跡調査報告書(2):129-136.
- [13] 劉璐瑶. 2020. 中国人日本語学習者の会話におけるワタシはの過剰使用について[J]. さいたま言語研究(5):58-71.
- [14] 姫野仁美. 1999. 学習者のわたし使用に対する母語話者の判断[J]. 日本語教育方法研究会(6):56-57.

A Survey of the Use of First Personal Pronoun by Chinese learners of Japanese in spoken Japanese

He Sanling

(Hunan University, Changsha, 410000)

Abstract: This survey uses the "Dialogue" project in the International Corpus of Japanese as a Second Language from the National language Research Institute of Japan. This paper makes a quantitative investigation on the use of first personal pronoun by Chinese learners of Japanese and Japanese native speakers in spoken Japanese from the perspectives of the use of self-proclaimed words and the co-occurrence of Japanese auxiliaries. The results are as follows: in terms of the forms of use of first personal pronoun, Chinese learners of Japanese and Japanese native speakers mainly use the form of "わたし". However, there are statistical differences in the number of use between Chinese learners of Japanese and Japanese native speakers; with the increase of Japanese proficiency, the use of first personal pronoun by Chinese learners of Japanese will increase, but the amount of use will be less on the whole. From the perspective of co-occurrence of auxiliaries, in addition to "first personal pronoun + ha

", Chinese learners of Japanese are significantly more likely to use "first personal pronoun + no" and "first personal pronoun + ni" than Japanese native speakers.

Keywords: first personal pronoun; overuse; Chinese learners of Japanese

作者简介 (可选): 何三玲, 湖南大学外国语学院, 硕士在读